■■展　望■■

敵を見て矢を矧ぐ／矢を矧ぐための敵

岡野裕行

1　はじめに

世界的に広まっているCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）は、二〇二〇年八月現在でも収束の気配がまったく感じられない。できる限り対面のやり取りを避ける生活様式が求められるなかで、多くの大学が卒業式・入学式の中止や縮小を決め、春先からの講義のオンライン化を急ごしらえで進めてきた。大学によってはキャンパスへの学生たちの入構を禁止し、大学図書館も通常開館ができない状況となった。そしてこの半年ほどの間に、研究環境も大きく変わった。国立国会図書館は三月上旬から臨時休館を続け、対面サービスを全面的に取りやめた。六月からは抽選予約制による入館制限へ切り替えたが、国立国会図書館の対応に象徴されるように、多くの図書館で通常利用ができなくなり、研究に必要な資料へのアクセスが困難となった[1]。最低限の感染症対策を整えるまで、公共図書館を休館した自治体も少なくない。

図書館業界の動きを見ると、カーリルとsaveMLAKが四月上旬から全国の図書館の動向調査を継続的に実施し、その結果をオープンデータとしてウェブに公開している[2][3]。また、五月には日本図書館協会がガイドラインを策定し、（来館者名簿の作成の件で当初は混乱を招いたが）全国の図書館へと通知した[4]。全国各地の大学図書館も、それぞれの大学の全学的な方針に従う形で対応策を決定した。影響は学会活動にも及んだ。対面による研究発表会を中止にしたり、急遽オンラインでの開催に踏み切ったりした学会も少なくない。また、COVID-19が引き起こした動向を記録するアーカイブプロジェクトを、デジタルアーカイブ学会が部会活動として進めているように、今現在の私たちの生活環境の変化も保存対象にもなっている[5]。

以上の経緯を含めた図書館業界の動向は、猪谷氏が詳しくまとめている。[6] それぞれの機関ができる限りの対応を続けている。それでも今回の社会的な混乱が想定外の事態である以上、COVID-19への対応はいずれの機関でも後手に回らざるを得ない。目前に必要が迫ってから初めて準備にとりかかるような対応を「敵を見て矢を矧ぐ」と言い表すが、この言葉は今日の文学情報のデジタル化と文学研究が置かれている研究環境にも通じる。二〇二〇年現在のデジタルアーカイブは、図書館施設が満足につかえなくなる状況下において、従来の紙媒体を中心としたコレクションの閲覧機能を補うほどの十分な備えになっていない。感染が広まる様子を見てから矢を矧いでも間に合わない。備えが不十分な現状をCOVID-19はあぶり出した。

2　文学研究の近未来

とはいえ、二〇一九年までに進められたデジタルアーカイブの蓄積は、可能な範囲で私たちの研究活動を助けてくれている。J-STAGEやCiNii、各大学の機関リポジトリなど、デジタルコンテンツの活用がこれまで以上に注目されるようになった。アマビエの流行はデジタルアーカイブの力を特に強く印象づけたできごとだろう。[7] また、近年はクリエイティブ・コモンズを活用したオープンデータの取り組みが全国各地で推し進められており、オンライン上で入手可能な情報資源が増えていたことも幸いだった。[8] 昨今では美術館・博物館・図書館などの文化施設での活用を想定したRS（Rights Statements）も注目され、情報資源のさらなるオープン化が期待されている。[9]「青空文庫」「国立国会図書館デジタルコレクション」「みんなで翻刻」「ジャパンサーチ」など、多くの人たちの協力のもとに、情報資源のデジタルデータを公開する仕組みも整ってきている。[10][11][12][13]

このような動きにが進むにつれて、「デジタル・ヒューマニティーズ」（DH／人文情報学）の考え方も浸透している。[14] 永﨑氏は、「未来に向けて文化をよりよく伝えることを目指すなら、これから一層インフラとして定着し、広く情報を流通させるための主要な場になるであろうデジタル世界を、文化を伝える媒体としてふさわしいものにしていくという努力を誰かが担わなければならない。デジタル技術の専門家のみならず、そこには、伝えられる文化についてよく知る人々の力も当然のことながら不可欠であり、そして、紙媒体のエコシステムに携わってきた様々な関係者の知識と経験もまた、その将来像を描く上で重要になるだろう」と述べている。[15] 永﨑氏の指摘にある「伝えられる文化についてよく知る人々の力」には、近代文学研究に携わる専門家として、本会の会員も当然そのなかに含まれる。

また、楊氏はデジタル人文学の論点を整理するなかで、①デジタル環境の出現と普及（過去のできごと）、②人文学諸分野との融合（現在における新たな取り組み）、③デジタル人文学の可能性や辿るべき道筋（未来のための教育環境の整備と人材育成）、という三つのアプローチにまとめている。[16] 特に本会の会員に

は、②の視点（研究関係を構築できる他分野の研究者との協働作業）と③の視点（大学や地域における文学教育とウェブを通じた文学情報の発信）のように、文学研究とデジタル情報資源との関係を再構築することが問われるだろう。デジタル化は資料そのものの問題のように思えるが、「何をデジタル化するか」「どのようにデジタル化するのか」「どのようなシステムを構築するのか」などの一連の判断プロセスの集合であり、それらはむしろ人の問題である。文学を通した人と人との関係をいかに再構築するのか、そのための具体的な方法の検討が求められる。

3　私たちのデジタル人文学

それではデジタル人文学の一翼を担う立場にいる近代文学の研究者に求められる協働とは、どのようなものだろうか。

一つ目は、同じ近代文学を研究する研究者同士の協働である。学会での発表や参加によって研究者同士の関係を構築したり、そこからさらに共同研究へと繋げてみたりすることもできる。いかにして学術的な議論の場を確保するかが絶えず問われることになる。また、先に言及した楊氏による②の指摘を考えれば、研究領域の異なる他分野の研究者との学際的な交流機会に参加することも必要だろう。二〇二〇年は学会のオンライン開催が主流となったが、従来の対面式で散見された非公式な交流（インフォーマル・コミュニケーション）の場が失われたことには注意したい。特に若手研究者の新たなネットワーク形成に支障が出ている可能性が高い。

二つ目は、図書館・博物館・文学館など、情報資源を収集・保存している文化施設の職員である。たとえば山口県立山口図書館では「国立国会図書館デジタルコレクション」と「青空文庫」のデータを活用した形で、ゆかりのある作家のデジタル資料をまとめている。[17] 図書館では自館に関係のあるウェブ上の情報資源をまとめることもコレクション構築における重要な業務だが、専門家である文学研究者からの情報提供も歓迎されるだろう。また、国立大学図書館協会では、「大学図書館は、さまざまな能力やスキルを有する人材が混在するハイブリッド（複合的）な人材の集合体を形成することで、大学図書館に期待される新たな役割を果たすとともに、多様な知の共有と創出を促す」という人材育成の目標を立てている。[18] その上で、①キュレーション機能（教員、職員、研究者、学生等を含むさまざまな能力やスキルを有する人びとと図書館職員とが一体となり、蔵書の評価や選別にかかる）、②ファシリテーション機能（人と知識や情報、あるいは人同士の相互作用を促す）を図書館サービスとして重視する提言を行っている。これを受けて竹内氏・國本氏は、「大学図書館に新たに求められている機能は、これまでのようなメディア／コンテンツを中心とした基盤整備ではない。これらを前提とした、学習支援や教育活動に直接的に関与する活動、学術コミュニケーションの円環の中での学術情報の生産、普及、利用を促進する活動を展開することである。このような活動の

中心にあるのは人（User）である」と、人と人とのつながりの重要性を指摘している[19]。文学研究者が人と人との関係構築を考える上で、大学図書館員が介在することによるネットワーク形成の効果は、これまで以上に検討されてもいいだろう。また、江上氏は「図書館やアーカイブがユーザを想定するとき、多くの場合そのユーザは資料・情報を受けとる立場であり、すなわちサイクルの〝川下〟に位置するという前提がある。では、図書館・アーカイブのユーザは川下にいる、というユーザ像を逆転させて、サイクルの〝川上〟にいる立場もまたユーザとして考える」というように、情報生産者も含めて利用者と見なすという指摘を行っている[20]。アーカイブと利用者との関係は、単純に一方向へと進むものではないため、より大きな視点から情報の流れを見据えなければならない。

三つ目は、図書館・博物館・文学館などの文化施設の設置者である。これには自治体や学校法人の関係者などが含まれる。田良島氏が「情報を出す側にとってデジタルアーカイブの公開がなかなか進まないという話は、行政的に言うと、公開することの評価がしづらくて優先順位から落とされるという側面が強いんです。展覧会であれば何人入ったとか、展覧会批評で評価されたとか、見えやすい。ネット上のデジタル情報の公開は何を指標にするかがわかりづらい。こういう使われ方がされるんだというフィードバックが可視化されると、必要性を理解してもらいやすいと思っています」と述べているように、デジタルアーカイブを考える場合には、設置者へのフィードバックが重要となることが指摘されている[21]。利用者によるフィードバックの先に、そのアーカイブ事業の優先順位を決定する人たちがいる。安定したデジタルアーカイブ環境を維持するには、その足場を切り崩されないように、利用者としての研究者の声をアーカイブ機関へと日常的に届けていく必要があるだろう。資料保存の分野では、経営・財政的な対策をプリザベーションと呼ぶが、デジタルアーカイブの構築・維持においても、経営や財政の問題と絡めた巨視的な視点が必要となるだろう。

四つ目は、学術出版社や大学出版会などの出版事業体との協働である。従来からの紙媒体による学術出版のほか、デジタル形式による公開方法も探ることができる。たとえば雑誌論文のオープンアクセスは一般的になってきたが、今日では単行書の事例も見られる[22][23][24][25]。これは自らが関わる学術情報資源を紙媒体による出版で終わらせるのではなく、その届け方を考え続けるということである。ただし、出版社は営利事業として出版を行っているため、単純にオープンアクセスを賞賛するだけではなく、事業を続けるための利益を生み出しながら学術出版を継続していける仕組みづくりも問われるだろう。

五つ目は、文学教育の受け手側にいる人たちとの協働である。研究者は大学の講義や市民講座などにおいて、文学教育を日頃から行っているが、ウェブを活用した展開の余地はまだ残っている。また、文学に関するデジタルコンテンツへの理解

を育むには、昨今多くの図書館・博物館で実施されているウィキペディアタウンの取り組みも参考になる。[26][27] 現在は対面形式のイベント実施は自粛傾向にあるため難しいかもしれないが、文学にまつわる出来事を調べてウェブの更新作業に参画してもらうことは、市民レベルでの文学への理解を深めることにもつながる。また、相宗氏が紹介する住民協働による地域資料の活用や「思い出のこし」などの取り組みも大いに参考になる。[28]

いくつか協働の可能性を示したが、研究者個人でできることには限りがある。そのため、まずはデジタル技術の力を借りることで、文学研究の裾野を広げることを目指したい。裾野を広げるというのは、文学について調べる力がある人、調べたことを誰かに伝えることができる人、情報を広めるための仕組みをつくれる人など、文学研究に関わる当事者を世の中に増やしていくことである。それは文学に関する情報資源を、いかにして私たちの公共財としていくのかを考え続けることでもある。

4　敵になる

COVID-19 は、私たちと紙媒体との関わり方や対面サービスのあり方を変え、私たちをデジタルコンテンツに向き合わざるを得ない状況にした。しかし、私たちは文学研究とデジタルコンテンツの問題において、COVID-19 と戦っているわけではない。戦いの土俵はそもそも異なっている。現在の状況下で、私たちが戦っている敵とはいったい誰のことだろう。

大向氏は「ジャパンサーチ」を語る鼎談のなかで、情報提供とウェブシステムを構築する立場を代表して、「提供側もシステム側も含めて、この先のことは全然わからないということをちゃんと認めることだと思う。そもそもネットサービスは、最初の二年間くらいはすぐに理解されるとは思ってはいけない。その間はじっと耐えてほしいと思う。二年経つうちに、誰も想定していなかった使い方がきっと現れるだろうと。それが出てきたら勝ちだと思います」と述べている。[29] デジタルアーカイブのシステムを構築している者たちは、「誰も想定していなかった使い方」をする利用者の出現を待っている。自分たちが想定していたつかい方にとらわれることなく、その想定を軽やかに乗り越えてほしいわけである。文学研究に携わる者たちは、システムの利用者として、想定外の動きができるだろうか。

そして高梨氏は、図書館員がレファレンスサービス能力を向上させていくことを考えるなかで、「利用者からはいろんなことを学ぶ。鍛えられる。鍛えてくれる利用者を、わたしは『良い敵』と呼んだ」と述べている。[30] レファレンスサービスに携わる図書館員は、利用者との関係から新しい視点を身につけている。図書館のレファレンス対応力を形づくるところの根本にあるものは、図書館利用実績の蓄積と図書館員への問いかけである。利用者が図書館のレファレンス能力を高め、図書館サービスの質を向上させていることは、国立国会図書館「レファレンス協同データベース」からも窺い知ることができる。[31] レファレ

ンスサービスの質とデジタルアーカイブの整備は別の話と思うかもしれない。だが、アーカイブ化の作業は、利用者の需要の高い資料から優先的に行われる。その優先度の高さを図書館側に伝えているのは、利用者自身による図書館利用の実績だろう。ならばレファレンスサービスが向上していくその先に、デジタルコンテンツが発展していく未来の地平も見えるはずだ。図書館にとって想定外の刺激を与えてくれる利用者の存在は、良質なデジタルコンテンツを生み出すための良い敵なのだ。

図書館と文学研究の関係については、宗像氏が「「アナログからデジタルへの回路を経て、さらにデジタルからアナログを再発見して行くコース」を、資料の所蔵者である図書館がどのように提供できるか、またそれに研究者がどう寄与できるかということが、問われているように思われる」と指摘している。[32]本稿の論旨にも関わるが、COVID-19を経験した今日では、それに加えて「デジタルのままでの再発見」という回路にも注目しなければならなくなったと言える。二〇二〇年の図書館は紙媒体資料へのアクセスが制限された状態から始まった。それはCOVID-19がもたらしたものだ。だが現状のデジタルアーカイブの物足りなさをもたらしたのは、二〇一九年までの私たち利用者自身による過去の図書館やデジタルアーカイブのつかい方に起因するものである。

改めて確認するが、「図書館施設が対面利用できなくなったこと」と「満足のできるデジタルコンテンツが入手できないこと」はそれぞれに異なる問題である。前者はCOVID-19がもたらした直接的な影響だが、後者はそれ以前の状況から何も変わっていない。COVID-19以前に準備していたものがすべてであり、後者の問題はデジタルアーカイブの利用者も大いに反省すべきことである。文学研究のデジタル化を積極的に進めるためには、①文学研究者が自らの研究情報のデジタル化を積極的に進めること、②デジタルアーカイブ事業に参画し、そのための仕組みづくりに協力すること、③デジタルアーカイブの積極的な利用者になること、④デジタル化に協力できる人々を育てること、などが問われるだろう。

岡田氏は、「遠い世のことはひとまずおくとしても、私たちは次の世代に渡せずに潰えてしまうものを多々見送ってきました。それでも、私たちは伝わってきたもの、残してゆくべきものをさらに次世代に残すべく、蔵や、あるいは図書館や博物館などの施設を作って大事にしてきました。私たちが残すものが私たちそのものだからです」と述べた上で、デジタルアーカイブの可能性について多様な問題提起を行っている。[33]過去から現在まで残してきたものは、私たち自身の姿である。研究者たちの利用者としての振る舞いが、公共財としての質の高いデジタルコンテンツやシステムをつくる原動力となる。そしてその取り組みは、現在に生きている私たち自身を、さらなる未来に残していくだろう。COVID-19以前の世の中を振り返ってみたとき、私たちは図書館やデジタルアーカイブにとって良い敵

だっただろうか。そしてCOVID-19後の世界において、文学研究者は図書館員やシステム構築者たちが矢を矧ぐための良い敵になっているだろうか。

注

（1）国立国会図書館「東京本館における抽選予約制による入館制限のお知らせ」二〇二〇年［https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2020/200601_01.html］

（2）カーリル「COVID-19　多くの図書館が閉館しています」二〇二〇年［https://blog.calil.jp/2020/04/stay-at-home.html］

（3）saveMLAK「COVID-19の影響による図書館の動向調査」二〇二〇年［https://savemlak.jp/wiki/covid-19-survey］

（4）日本図書館協会「図書館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドラインについて」二〇二〇年［http://www.jla.or.jp/home/news_list/tabid/83/Default.aspx?itemid=5307］

（5）デジタルアーカイブ学会「新型コロナウィルス感染症に関するデジタルアーカイブ研究会」二〇二〇年［http://digitalarchivejapan.org/bukai/sig-covid19］

（6）猪谷千香「コロナ禍で否応なく再編される世界のなかで、図書館は変わるのか／変われるのか」『ライブラリー・リソース・ガイド』三一号、二〇二〇年、一〇八～一一七頁

（7）京都大学図書館機構「新聞文庫・絵」［https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000122］

（8）コモンスフィア「クリエイティブ・コモンズ・ライセンスとは」［https://creativecommons.jp/licenses/］

（9）数藤雅彦「Rights Statementsと日本における権利表記の動向」『カレントアウェアネス・ポータル』三四三号、二〇二〇年［https://current.ndl.go.jp/ca1973］

（10）青空文庫「青空文庫」［https://www.aozora.gr.jp/］

（11）国立国会図書館「国立国会図書館デジタルコレクション」［https://dl.ndl.go.jp/］

（12）国立歴史民俗博物館、東京大学地震研究所、京都大学古地震研究会「みんなで翻刻」［https://honkoku.org/］

（13）国立国会図書館「ジャパンサーチ」［https://jpsearch.go.jp］

（14）永﨑研宣「デジタル・ヒューマニティーズとテクスト研究」『日本近代文学』九五集、二〇一六年、一四三～一五〇頁

（15）永﨑研宣『日本の文化をデジタル世界に伝える』樹村房、二〇一九年

（16）楊暁捷、小松和彦、荒木浩編『デジタル人文学のすすめ』勉誠出版、二〇一三年

（17）山口県立図書館「国立国会図書館デジタルコレクション・青空文庫で読む「ふるさとの文学者十三人」」二〇二〇年［https://library.pref.yamaguchi.lg.jp/ybungaku-NDL］

（18）国立大学図書館協会「国立大学図書館機能の強化と革新に向けて　国立大学図書館協会ビジョン２０２０」二〇一六年［https://www.janul.jp/sites/default/files/2018-05/janul-2020vision.pdf］

（19）竹内比呂也、國本千裕「大学図書館機能の変化に対応する新しい大学図書館員の育成に関する考察」『大学図書館研究』一一四巻、二〇二〇年［https://doi.org/10.20722/jcul.2062］

(20) 江上敏哲「「誰でも」とは誰か　デジタル・アーカイブのユーザを考える」『デジタル・アーカイブとは何か　理論と実践』勉誠出版、二〇一五年、二七～四七頁
(21) 梅林秀行、田良島哲、大向一輝「座談会　ジャパンサーチの未来の話をしよう」『国立国会図書館月報』七一一・七一二号、二〇二〇年、一〇～一九頁［https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_11516814_po_geppo200708.pdf?contentNo=1］
(22) 天野絵里子「欧州における単行書のオープンアクセス」『カレントアウェアネス・ポータル』三三三号、二〇一七年［https://current.ndl.go.jp/ca1907］
(23) 笠間書院「江上敏哲『本棚の中のニッポン　海外の日本図書館と日本研究』」二〇一七年［https://kasamashoin.jp/2017/11/pdf_24.html］
(24) 文学通信「下田正弘・永﨑研宣編『デジタル学術空間の作り方　仏教学から提起する次世代人文学のモデル』全文公開サイト」二〇一九年［https://bungaku-report.com/sat.html］
(25) 国立国会図書館「米・ブラウン大学デジタル出版イニシアティブ、同大学初のボーンデジタルの学術単行書を米・ヴァージニア大学出版局から出版」『カレントアウェアネス・ポータル』二〇二〇年［https://current.ndl.go.jp/node/41582］
(26) 国立国会図書館「東久留米市立中央図書館（東京都）、東久留米を舞台にした作品や文学者をテーマに「ウィキペディアタウン in 東久留米」を開催」『カレントアウェアネス・ポータル』二〇二〇年［https://current.ndl.go.jp/node/39904］
(27) 国立国会図書館「神奈川県立図書館、「Wikipedia ブンガク松本清張」を開催」『カレントアウェアネス・ポータル』二〇一九年［https://current.ndl.go.jp/node/37841］
(28) 相宗大督「公立図書館における住民との協働による地域資料サービスの構築」『カレントアウェアネス・ポータル』三二八号、二〇一六年［https://current.ndl.go.jp/ca1876］
(29) 前掲(21)
(30) 高梨章「よい　敵にあわせて下さい」『情報の科学と技術』六九巻四号、二〇一九年、一五五～一五九頁［https://doi.org/10.18919/jkg.69.4_155］
(31) 国立国会図書館「レファレンス協同データベース」［https://crd.ndl.go.jp/reference］
(32) 宗像和重「デジタルから紙へ　図書館と文学研究」『日本近代文学』八四集、二〇一一年［https://amjls.jp/zasshi/084.pdf］
(33) 岡田一祐『ネット文化資源の読み方・作り方　図書館・自治体・研究者必携ガイド』文学通信、二〇一九年

【キーワード】デジタル人文学、デジタルアーカイブ、図書館、文学研究、協働

（おかの・ひろゆき／皇學館大学）